

熊野の  
ホコから

# 怪野の熊

## 「本宮町の怪異(其の四) マヘンモノ」



和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授



本宮の請川付近には、昭和20年代頃は請川谷鉱山、大津賀谷鉱山、松畑鉱山、大塔鉱山、雲取鉱山で蛍石が産出されたが、いずれも小規模、短命であった。蛍石は、古くから製鉄などの融剤として用いられ、現在では望遠鏡やカメラの望遠レンズなどで高性能化のための特殊材料として利用されている。

本宮は熊野川に沿った場所であるせい、ゴランボ、ガランボウなどと呼ばれる河童(かつぼ)話が伝わる。その姿は、痩せて、目がくりくりしていて、頭に皿があるという。性質は、キユウリが好物、子どもや牛を深みに引きずり込む、時には尻子玉を抜いて溺死させる凶悪なものまでいたという。名前こそ違うが、姿や行動は一般に

理解される河童と同じだ。しかし、それは「夏の間だけ」という注釈が必要になるのが本宮の河童の特徴である。本宮の河童たちは、冬になると山に登り、カシヤンボ、カシラ、マヘンモノと呼ばれる化け物に変化するという。



本宮の川にはかなり多数のゴランボ(河童)がすんでいたらしく、ある家では「どのふちにはゴランボが何匹おっつて、などゴランボの頭数管理を行っていたという。ゴランボ台帳なんかがあったのなら、ぜひ見てみたいものだ。

こゝまでは、本コラムでも幾度となく取り上げてきた熊野の他の場所の河童話とたいして同じである。河童は「ヒトの唾が嫌い」という話は熊野の広範囲でよく聞かれるが、本宮の河童の中には「鎌が嫌い」というモノがあり、全国的に多い「鉄が嫌い」な河童の派生話かもしれない。河童は水の中にいるため、洪水が来ると被災する。だから、燃料確保のために森林を荒廃させる「鉱業」を嫌うという。本宮で鉱山というと、近世では、山奥の道湯川鉱山、大瀬の皆根鉱山があり、人里の請川付近では製鉄などの融剤に用いる蛍石が産出された。しかし、そもそも鉱業は盛んではないし、冬は山に夏は川にい

た「金属が嫌い」な人々は本宮では思い浮かべない。では、季節移動をした人々の中で「鎌」と対立構造にあった人々はどうか？ 炭焼きさんたちなら、それに当てはまりそう。炭焼きさんたちは基本的に山人だが、冬は山で炭を焼き、夏は里に降りて炭を売るか籠編みをしたという。山人の象徴はノコギリやオノであり、里人の象徴は鎌である。この山人と里人の対立構造との解釈は、ひとつのヒントではないかと筆者は考える。

有名な民俗学者である柳田國男は、山窩(さんか)と差別されることもあった山人は、日本の先住民で特殊な文化を持つと主張したが、熊楠は「山に暮らす普通の人々だ」と真つ向から対立した。どう考えても、熊楠の話の方が普通に聞こえる。となると、柳田よりも熊楠の方が常識人だったということになるが、世間の評価が逆なのは興味深いことである。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

